
居候とニートと悪友と

多島途

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

居候とニートと悪友と

【Nコード】

N71660

【作者名】

多島途

【あらすじ】

両親が交通事故で亡くなり、飼ってた猫も帰ってこず、元気の良かった金魚たちも次々と死んでいった。

そんな不幸少女の明日あした 晴はれ。彼女の居候先は一人暮らし…？のニートの家だった！？

そんなニートの名前は日向 歩ひなた あゆむ。彼にはたくさんの秘密があった…ニートには畔川 彪雅あぜかわ ひゅうがという悪友がいる。悪友にもまたたくさんの秘密があるのだった…。 8／8内容は変わってませんが、1話1話が短かったのでくっつけました。

いつの間にか6000PV突破している…だと!! まじ感謝感激雨
霰っす!!

1..プロローグ

一人の少女が夕立ちの中、傘もささずに歩いている。
その表情はとても暗く今にも泣きそうである…
少女は言った、掠れた声で

「お母さんとお父さんのところに逝きたい」

その言葉をいった瞬間彼女はいっそう悲しそうな表情をした
それでも彼女の瞳からは涙が零れない
正確には泣くことが出来ないのである

つい先ほどまで両親の葬儀が行われていた…
葬儀の費用は両親の遺産で何とかなかった
けれどこれからどうなるかは分からない
何処かの家に行くことになるのだろうか
愛猫の葬も帰ってこない、飼っていた金魚も死んでしまった
大好きだった両親のいないこれからを過ごせるのだろうか
そんな不安に駆られながらも葬儀に来てくれた親戚に挨拶をしていたのである

びしょぬれの喪服で彼女は自分の家に帰ってきた。
いつも玄関で寝ていた葬も今はもうどこかに行ってしまった…
彼女を迎えてくれる人はもう…いない

「お風呂……入ろ」

頭の中から両親の骸となった姿を消し
彼女は何も考えないようにした

2..1-1

次の日、彼女のもとに遠縁の親戚がやってきた。

見た目は美青年：目元が垂れていてとても優しそうな人である

「こんにちは、晴さん」

「…こんにちは」

どういったご用件でしょうか…？」

「今日は晴さんにお願ひ事をしに来たんです

実は…私の弟のと一緒に暮らしてほしいんです」

突然の言葉に思考停止状態に陥った晴。

美青年もとい加波^{かなみ}さんは構わず言葉を続けた。

「理由はね晴さんは、とても優しい子といつも自慢げに靖さんから聞いていたから…ですかね

あとは靖^{やすし}さんは私の父と遠い親戚というより親友として良く飲んでいたんです

その時に良く私も同席していましたね、晴さんのことをとても自慢していましたよ

晴さんが小さい頃に一度だけ麦さんと一緒に会ったことがあるんですよ？

覚えて…るわけありませんよね

何しろ私が12の時のコトですから…まだ晴さんは2歳でしたし」

靖と麦は晴の両親の名前である。

晴の10歳年上という事は加波は26歳である

「あの：加波さんの弟さん：はどんな方なんですか？」

思考停止状態から帰ってきた晴

「歩は：母が死ぬまでは明るくて優しい子だったんです：今は父とも勿論私とも会話を全くしませんしね」

そういった彼の表情はとても悲しそうだった

「あの：すみませんでした、言いづらい事を：ずかずかと：」

「良いんですよ、母の事も歩の事も：」

こちらこそいきなり上がり込んで弟と一緒に暮らせだなんて女の子に頼む事じゃなかったですね、浅はかでした：すみません晴さん」

「あ、い：いえ全然

私、今独りですし：誰かと話してた方が気も紛れますし

加波さんが来てくれてよかったです：ありがとうございます。

弟さんの事も私でよければ：葵もいなくなってしまってた寂しかったところなので」

「葵？」

「可愛がってた三毛猫です：いつの間にかいなくなってた葵は子猫のころから体が弱くて外に出したことがなかったんです：なの」

「そう：ですか、

搜索願を出してみますね？」

「いえ、あの：すみません

：いいんですか？」

「ええ、お礼という訳ではないのですがそのくらいはさせて頂かないと私の気がすみませんし：ね」

にこりと笑って言ってくれた。

「：ありがとうございます！」

「引っ越しの業者にはこちらから連絡しておきますから明後日にまた来ますね」

「はい、気をつけて帰ってくださいね」

— — — — —
— — — — —
— — — — —

引っ越しから今に至るまでのこの速さはとてつもなくかった
そして晴が一番驚いたことは、一人暮らしのはずなのにとっても広い
家だった。

加波さんが言うには、歩さんが出てくと言った時に二人の父が家を
買ってくれたそうで：

「父は母が死んでからはあまり歩と関わらなくなりました：
勿論私ともね：」

「加波さんはおじさんと一緒に住んでるんですか？」

「あ、いえ：私はもう結婚していますから、住んでいるところは二
人と別々です」

新事実…!!

加波さんは1つ年下の可愛らしい奥さんがいるみたいです

「そうなんですか、」

「はい、歩の事お願いします。私はこれから仕事があるのですみません
せんが失礼します…」

晴さん、歩はいい子ですから心配しないでくださいね？」

「分かりました…えっとさようなら、お仕事頑張ってくださいね」

「はい、では」

！
ブロロロロ

晴の心境は微妙に複雑だった

トントン拍子に事が進み、歩さんと同居…承諾したはしたけど仕事
が早すぎる…（汗）

晴は自分がこれから毎日生活する事になるお家に足を踏む入れた。

誰もいないかのようにシンと静まっている

「お、お邪魔します…」

少し上がるのを躊躇ったものの少しの勇気を出してリビングに向か
った

「あの…歩さんいますかー…？」

ーにああ

ーなーご

ーにやあん

ーふしやあああつ！

「え…？猫がいっぱいいる…」

晴が開けた玄関からぞろぞろとたくさんの猫が家に上がっていったいきなりの訪問者に晴は目を白黒させている

「トン、トン、トン…」

「…猫共、飯だ」

いつのまにか階段の踊り場から大量のイワシが入った袋を持った青年が猫達を呼んでいた

「誰だあんた」

「ええ…？えっと…明日歩さん…ですよね？」

猫の可愛さに見惚れつつもなんとか確認をとる晴

「そうだ…と言いたところだが俺は違う。

俺はアイツの悪友だ

あんたは、不法侵入じゃねえよな…さっき荷物が運び込まれてるの見たし

ああ…加波に頼まれた親戚ってあんたか」

一人で話をしている歩さんの悪友という名も知らない青年が不意に思い立ったように上に上がって行った

「…悪友？というか行っちゃった…どうすればいいんだろう、僕
何を隠そう、実は晴は僕っ子だったのである
葬儀や加波さんの前では敬語スタイルにしていた為、一人称が私だったのだ

余談だが、晴は好んでボーイッシュな格好をしているため男の子にしか見えないのである

3..1-2

どうすればいいか分からないためボーっと意識を飛ばしていた晴は、先ほどの青年がいつの間にか自分の目の前にいた事に気がつかなかった。

というか現在進行形で気が付いていない

青年は小さくため息をついて彼女の名前を呼んだ

「ハレ」

「え、あ？は、はい！？」

いきなりの事にまたもや目を白黒させている
もしかして目を白黒させるのが得意なのか？…と甚だ疑問に思うところである

「やっぱ、あんたがハレか

そうだな…俺はミコトとでも呼んでくれりゃあいい」

「ミコトさん…ですか？」

「そうだ。だがさん付けはしなくていい
さん付けされるとか気味悪いんだよ」

ここまではつきりと気味悪いといわれると
さん付けはできないだろう…

「はあ…えっとミコトって呼べばいいんですか？」

「そーそ、良くできました

その調子で歩も起こしてきて、

二階の一番奥の部屋が寝室だからそこで寝てるんじゃない？」

まさに休まる暇もない…である

晴はミコトの背後に不思議なオーラ見えるようで断りにくいよう…
というより断れないようだ

「ミコトさん：ミコト、勝手に寝室に入ってもいいんですか？」

さん付けをしようとしたら冷たい微笑で見られたので慌ててミコト
と呼びなおした

「別に平気、平気

所詮、歩だし

俺が親切で起こしてやっても起きなかったから、後はハレに任せる
よ」

「はあ、分かりました…」

「タン、タン、タン、タン

「寝ているという事はお昼寝でもしているのかな…？」

一番奥の部屋…あ、何かドアに貼ってある」

ドアに貼ってあった紙には筆字で

『就寝中、起こすべからず』

と無造作に紙が散らばっている

絶句。

「…」

「モゾッ

布団？に包^{くる}まっている物体が紙を落としながら寝返りをうった

ミコトに言われた通りに起こすべく紙を隅に整えていきながら道を
作っていき歩さんと思わしき物体まで近づいていく

「あの、あ、あ、歩さん！？」

「—にやあ〜？」

布団から出てきたのは猫だった

「あれ？猫ちゃんって…

葵！！」

「—にやあああ！！」

愛猫葵と飼主晴、感動の再会！

「……うるさい」

―にあ…

もう一人と一匹が不機嫌そうに布団から顔を出した

「えっと歩さんですか？」

「そうだよ…、」

…君が晴か

加波から一応話だけは聞いてるよ

この家で好き勝手は許さないからね？」

4..1—3

「ええ…と、まあはい勝手に何かをするつもりはないです」

「そう、ならいいや」

ひゅうが
彪雅は？」

彪雅？初めて聞いた名前だと…思う

歩さんは伝わらなかったことを理解したのかもう一度口を開いた

「さっき、階段を下りてったと思うけど

長髪キンパで目付きが悪い奴」

「えっと、ミコトなら会いましたけど？」

「「?」?」

二人して首を傾げる事に…

「おい、昼飯！」

ミコトが Bannon と音を立ててドアを開け晴が隅に寄せといた紙を気にせず散らしながら歩さんの前までやってきました

「……彪雅」

「ミコト！」

「彪雅：お前ミコトって何？」

「ん？可愛いニックネームだろ？」

「いや、全然…」

「あー？十分可愛いだろうが」

「彪雅はセンスが悪すぎるから分からないんじゃない？」

「…やんのか？」

「やだよ、痛いし」

彪雅は手加減を知らない間抜けだから、圧倒的に俺のが不利でしょ？
寝起きだし、とうにかまだ眠いし」

「……………て、てめえ」

あれ…いつの間にか喧嘩になっている。

ギャースギャースと二人で言い合っている間

晴は葵との再会に喜び一人と一匹はお互いにガシッと抱き合っていた

5..2—1

「葵、今日から僕ここのお家に住むんだよ！
歩さんの家に葵がいて良かった：

でも何で歩さんの家にいたの？？」

—にゃあ…にゃああん、にゃふう
にゃにゅう…にゃにゃにゃにゃー

「…」

僕が一人で出掛けて行ったから急いで追いかけようとしたら迷ったの？

そしたら彪雅…：ああ、ミコトが拾ってくれたの…？」

—にゃあ！

その通りと言わんばかりに鼻を高々と上にあげ、得意げな顔をする葵

「そうなんだ…ごめんね葵」

—どういたしまして、よ！

※ここから猫の言葉は訳していきます

「ありがとう！」

そしてまた抱き合う一人と一匹：

「君…」

「あ、あんた」

「「猫の言葉分かるわけ？」」

いつの間にか喧嘩をやめ、一人と一匹の会話？を聞いていた二人
「はい…分かりますけど」

「何で？」

「さあ…気がついた時にはもうは分かるようになっていたので
と正直に事実を述べる晴
歩さんとミコトはまだ納得はしていない様子

「黒。」

黒と呼ばれたのは歩さんが起き上った時に一緒に出てきた無愛想な
黒猫

―何…

「飛びかかれ！」

―うん…

命令通りになぜか動く黒…

そして晴は顔面に飛びかかれ葵を離しそうになってしまった…

「ええええええ！？」

飛びかかれた晴は、勢いで後ろに倒れそうになってしまい、
道連れ…というか吃驚して前にいたミコトの服を掴んでしまったミ
コトも一緒に倒れて行くことに…

黒はギリギリのところまで晴の顔から離れベツトに着地した
葵は晴の手から放り出され上に飛んで行った

「うわ…っ！」

「…は？」

―いやああああ！

ドタっ！！バサバサバサ

「ふぎゅっ…」

―間抜け

「ひどい…君が飛びかかって来たからなのに」

―ちょっと！晴に飛びかかるんじゃないわよ！！

そして晴に謝りなさい！

「あわわっあ、葵…僕大丈夫だから、喧嘩しないで？」

二匹が口喧嘩を始めたので晴は、慌てて止めに入る

―しょうがない…わねえ

―ふん…

―ふん…じゃないわよっ！何かツツけてんのよ！？

―…うるさいよブス

―ブ…ブスですってえ！？

うううう…晴ええ…

実は打たれ弱い葵…再発した口喧嘩に勝てずウルウルした眼で晴の方に視線を向ける

「こ、黒君。

葵は可愛いんだよ！飼い主の鼻屑目に見なくても、とっても可愛いんだから！

まあ…勿論猫ちゃんに不細工はいないけど、ねっ？

ブスなんて言わないでほしいなっ」

―…ふん

黒は一人と一匹に背中を向け歩さんの布団の中に潜り込んでいった

歩さんの隣がいつもの場所らしく歩さんのお腹の上に顔を乗せている

「おい三毛猫：俺の頭に乗るんじゃねえよ！
つか、降りろ！」

―あら？ごめんなさい

葵は優雅な動作で晴の腕の中に戻る

というかミコトも一緒に倒れたが、片手で自分の体重を支えて晴に重ならないように一応頑張ったらしい

そんなミコトの様子にミコトも一緒に倒れたという事に気付いた晴は慌てて謝る

「ミコト、すみません！！ミコトの服を掴んでしまって、
あの、ケガとかしてないですか？」

「ああ？平気：つか悪いのは歩と黒猫だろーが」
と言いながら、「俺関係ない」みたいな顔をしている歩さんと布団中に入って行った「我関せず」な黒を睨む

「君は魔術師か？」

”魔術師”

魔法や魔術、呪術を使い、常人には成しえないことを実現する者の
総称

「はい？ええ：違いますよ！

というか、私手品とかそういうことでできませんもん！」

”魔術師”

また、転じて手品師の事

魔術師本来の意味としてではなく、手品師という意味でその言葉を
理解した

「?？」

歩さんの頭には疑問符が浮いているだろう

なぜなら歩さんは、手品師という意味ではなく魔術師本来の意味と
して晴に聞いたのである

二人の様子に見兼ねたミコトは、仕方なし：といった感じで晴に説
明をする

「手品師っつー意味じゃなくて、そのまんま魔術師って意味で歩は
聞いたんだよ

つか、俺と歩は魔術師だしな

俺はソロモン72柱を始めとする天使・悪魔さまざまな異界の者を

召喚する、召喚術師

歩は等価交換を常とする、錬金術師だ

まあ説明するより見る方がはええな…」

ミコトはそういうと何処からか小さな銀のナイフを取り出し親指に傷を付けた

当然血は流れその血はミコトの手首を伝っていく

晴はいきなりの説明と行動に驚きを隠せない

『ソロモン72柱の魔神の1柱、序列5番・地獄の大総裁にして36の悪魔の軍団を率いる

マルバス

ソロモン72柱の魔神の1柱、序列49番・地獄の48軍団を従える偉大なる公爵である

クロケル

ソロモン72柱の魔神の1柱、序列35番・30の悪霊軍団を指揮する地獄の大いなる侯爵である

マルコシアス

契約主の前に姿を顕現せよ』

ミコトが言い終わると滴っていた血が集束し小さな三つの球を作ったそこから小さな三つの球は各々（おのおの）の意思があるように動き出し魔方陣と呼ばれる代物を描き出す

しばらくして直径10cm位の大きさの魔方陣が出来上がった
描き終えたと同時に赤い魔方陣はそれぞれ右から白・濃紺・赤の光を放ち三体の手乗りサイズの生物が召喚された

最初に白の光を放ち顕現されたのは強壮な青と白の斑な毛を持つライオンである

次に濃紺の光を放ち顕現されたのは天使の姿をしている

最後に赤の光を放ち顕現されたのはグリフォンの翼を持った人の姿をしている

「か、かわいいいいいいっ!!」

うわわ…可愛すぎるっ!!

ぬいぐるみみたいですー!

ミコト、触ってもいいですか!？」

晴は堰を切ったようにペラペラ話します

大の可愛いものの好きにはたまらない可愛さという事が安易に想像することが出来る

三体の姿を細かく説明してみる

斑のライオン、マルバス

ネコ科特有の猫目はとても大きくこれまた斑な色をした睫毛はとても長い

小さいため足も大きく（ネコ科は小さい時から足は大きい）それがまた可愛さを出している

中性的な天使、クロケル

白銀のショートヘアにクリンとした同色の長い睫毛、左目は赤く、右目は青である

その美しいコントラストには其処ら辺のビスクドールは勝てないで

あろう

神々しく光りを放つ俗に言う天使の輪も頭上に浮いている
クロケルは十字架をモチーフにした杖を持っている

グリフォンの翼を持つ、マルコシアス
黒い短髪にキリッとしたツリ目、両目ともに綺麗な水色の目をして
いる

二重の光輪が頭上に浮いている
手には両手剣を持っている

右手にもつ剣は深く澄んだ青

左手にもつ剣は燃えるような赤色

三体とも二頭身であることを考えながらこれらの特徴を想像してほ
しい

「…まあ、いいんじゃない？」

「こんにちは、お嬢さん

君はとても綺麗な心を持っているね」

「…ども」

「……」

上からミコト、マルコシアス、クロケル、マルバスである

7..2-3

—ぐうううううう

「ふああ…彪、今日の飯は何？
腹減った…」

歩のお腹は音を立て自己の空腹を表現した

ミコトはそれによってご飯が出来たから呼びに来たという事を思い出した

「あ、忘れてた…お前らの飯作ったんだった

お前らっていうのは歩と晴だから、誤認しないように…その三匹

んで、今日の昼飯はオムライスだ」

「のう、主…あるじ妾も腹が減ったぞ」

「…俺も、おむらいす…食べる」

「ん…僕もどっちゃかっていうとお腹が減ってるかなあゝ
とーゆう訳で僕らの分も至急作ってね、ご主人☆」

三者三様の、ミコトの話をスルーした言葉に呆れながらため息をつく
「聞けよっ！

つかお前ら腹が減るなんてことねえだろ…」

「…あの、私も作るの手伝いますから！」

「おお、晴殿は優しいのおゝ♪」

「ぐっ…じよぶ」

「どっかの誰かさんとは大違いだねえ☆」

晴もミコトの言った事を何気にスルーして、手伝いを申し出たそれにノリ、三体はミコトを攻めてみた。

←そして、折れた

「あーもーっ!!」

しょうがねーなあ!

作ればいんだろ、作れば…

お前らで一つ作ればいいだろ?」

「」「わぁー!」「」

しかしここで晴はある事に気付いた

「マルバス君ってネコ科だから玉ねぎ入った物は食べられないんじゃない?」

「ふ…たわごと戯言を妾も人型になれば済む事じゃ」

「ちっ…」

人型になればあたりからマルバスは己の姿を変えていた斑色?の美しい長い髪をもった美少女(??)になった
実際関係ないと思うが…

可愛い物好きのハレには(以下略

「飯食べに行くまで時間食いすぎだから!もう行くよ、ハレ」

「え、自分で歩きますから襟首引っ張らないで下さいよ、ミコトー」

引きずられながらもなんとか抗議するが

「ダ・メ。」

なんかハレを放すとまた話が進まなくなる気がするんだよね、何故だかはわからないけど」

即答され、ついでに作者の早く話を進めたい気持ちまで汲んでくれたミコト

超良い奴っ！！

「トン、トン、トン

「あんたが早く進めないからだろ…」

「歩さんは誰に向かって言ってるんですか??」

「ハレは気にしなくていいよ」

階段を下り終わってから、僕（作者）に突っ込みを入れる歩んで僕が存在を晴に気付かせないように配慮するミコト

上の感想とあんま関係ないんだけど突っ込み役は主にミコトの仕事かな…なんて僕はひそかに思う…。

「ああ、そ…すきにすればいいよ

まあ作者はあまりこちらに干渉しない方がいいと思うけど」

あ、それもそうだねえ：

「ミコト、今何か言いました？」

「なんも、ほら冷めちゃうから早く食べる！」

お前らは実際はお腹減らないんだから、後だよ

それについては異論を認めないから」

有無を言わせないような笑顔で晴とソロモンの三体を見る（脅すとも言う）

「は、はい

では、いただきます」

「んゝそればかりはしょうがないかゝ」

「食えるのであればわしはそれで構わん」

「…俺も」

やっとこさ、食卓まで足を運ぶことができた

「うあ…おいしそうですね!!」

って歩さんもう食べてますね…早い…」

「さすが、料理の腕だけが取り柄の料理バカ…」

小声で言った歩だがハッキリとミコトの耳に届いていたようだ

「な・ん・か・言・っ・た・か？」

この引きこもりニートが！

俺はお前と違って優秀じゃない下僕…後輩がいるし、仕事もしてる
しな！」

優秀じゃない下僕と思いつきし言ってますよ、ミコト君
その後輩さんかわいそーですねー

「別に優秀じゃない下僕なんていらないけど？
仕事は…僕だっしてさ、…たまにね」

…ん？

し、仕事をしている………だっ！？

題名通りにならないじゃないか
どうしてくれる歩君！！！

題名通りじゃないってもう本末転倒も甚だしいよ！！
ってこの使い方あってんのかな？？

「し、知らないし、
ていうか君早く食べたら？

食べないなら僕が食べてしまうけど…」

「はへ？ああつ、はい、だめです。私が頂きますっ
ミコト、いただきます！

（憎まれ口を叩きながらも歩さんはミコトの料理が大好きなんだな
あ…）」

なんてしみじみ思いながら《うまうま》とかあいい効果音をつけて
食べ終わりましたとさ！ちゃんちゃん♪

「え、終わらないよ？

作者さあいい加減でしゃばらないでくれるかな？

前話でも言ったよね、俺

君がいると結構話が進まないんだよね？」

ががーん！！

酷い…まあいいや、しばらくはナレーターとしてしっかり仕事をし
ますよーだ。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「ご馳走様でした！」

ミコト、とてもおいしかったです！！

でもなんでミコトはこんなに料理が上手なんですか？」

そうである、普通の大学生が料理は出来たとしても絶品を作ること
は早々出来ないのではないかと晴は考えたのだ

「…天才だから？」 ドヤッ

ドヤ顔で言い切った…

「普通に引くよ、それは…凄く、気持ち悪い」

「え…ないでしょ」

「主、キモいぞ」

「ない」

「自分で天才とかいう人って気持ち悪いわね

ーフツ

歩達以下3匹はミコトの発言に若干顔を青ざめてドン引き顔をしている

猫2匹（猫の言葉は晴以外には分からないが）に至っては嘲笑^{わら}っている

「ミコトって凄いんですね!!」

晴だけは真に受け見事に尊敬の眼差しでミコトを見つめている
それを見た葵とマルコシアスは慌てて晴に目を覚ますよう話しかける

「ちよ! ハレ、あんな気持ち悪い奴の言葉真に受けちゃだめよ!

「お嬢さん、自分のことを天才って言う奴はまともな奴じゃないから
氣をつけたほうがいいよ」

「お前ら揃いも揃ってひでえ言いようだな…
なんかもうハートブレイクなんだが…」

|| じゃあゝ、じゃあゝ ||

一定の猫の鳴き声が部屋に響くこの音は着信音のようだ

「ん?」

「…電話?」

「え、あっ! 未兎からだ…
すみません席外しますね」

パタパタと音を立てリビングを後にする晴

唯一の天然フォロー役が席を外したことによって居た堪れない雰囲気

気になった部屋…
隣みの視線の先にはミコト…

憐みの視線を向けられている頃

晴は電話相手と話を盛り上げていた

「帰ってくるんですか!？」

『うん、丁度四月の始業式にね!』

晴に会えるのすっごい楽しみだよ!』

「僕もだよー!」

『……今晴は何処に住んでるの?』

「あ…ああお父さんの友達だったという人の息子さんの家だよ」

実際には聞こえないような空気が固まる音が聞こえた

それには晴は全く気が付かないようだ

『息子って男?』

絞り出すように怒りを押しこめわずかな希望にかけて確認をとってみる

「そうだよ?」

晴はあっさりとそれを砕く

『結婚してる?』

「住むように手配してくれた人、お兄さんは結婚してるけど住んでる人…えっと弟さんはしてないよ」

『あ…そう』

ちよっと呼ばれてるから、戻らなくちゃ…

また電話するね…

ちなみに住所とわかる?？」

「うん、じゃあ忙しいみたいだからメールして教えるね!
じゃ、またねー!!」

無邪気に言い、確認をとる事もなく切ってしまった

— — — — —
— — — — —
— — — — —

アメリカ

ロサンゼルス

ミツヤ・サクライ宅

ごたごたと騒がしく大きな旅行バックに生活用品などをぶっ込んで
いる少女?がいた

「:母さん、俺今から日本に帰る」

「え? 未兔ちゃんなんで男モード?

というか帰るって: 一か月先の話じゃないの?」

未兔^{ミウ}ー本名 桜井未兔^{サクライミツヤ}耶ーは女装少年である

別に彼は男の娘という訳ではない

ただ小さい頃、晴に女の子と言ってしまった為それからずっと女の子
子で通してきたのである

まあ、言ってしまったてはなんだが未子の母が晴に性別のことは小さい
頃(その日のうち)に教えていたので未兔耶は現在進行形で無駄
な努力をしているのだ

「いや、今帰る」
と即答する

「そうじゃなくって住むところとかまだ用意できてないわ
…前のお家はもう売っちゃたのよ?？」

「当てならあるよ母さん

「というわけだからまた一か月後に会おうね」

さて、未兎耶君の言う当てとは何のことなんでしようね？

[illegible]

電話を切り、リビングに戻った晴は、未だに憐れんだ視線を向けられてるミコトに気づかず普通に話しかけた

「ミコト、マル君達にご飯作らなくていいんですか??？」

その言葉を聞いて反応したのはマルコシアス達とミコトである

「あ、ご飯」

「じゃな、
というか」

「……マル君？」

「……作る気失せたんが」

「あ、えとマルコシアス君って長いな〜って思ったので勝手に略しちゃったんですけど…」

と言いつを一応してみるがマルコシアスは全く気にしていない

というよりむしろ喜んでいようで鼻歌を歌いながらOKしてくれた

「ありがとうね、御嬢さん」

しかもお礼まで言われてしまった。

「いえ、こちらこそ！ミコト、早く作ってあげましょう！」「ミコトの作る気失せた発言など全く聞いていなかったらしくやる気がオーラとして見える位作る気満々である

「……………おー」

結果的にミコトは憐れんだ視線やスルーにより結構なダメージを負ってしまった

10…登場人物

明日 晴

16歳 ♀

158cm

僕っ子

ほんわかしている天然

たまに毒舌でS

低血圧で寝起きが悪い

「これからよろしくお願いします」

葵

4歳 ♀

70cm（尻尾含め）

晴の猫

晴が大好き

打たれ弱い

日向 歩

20歳 ♂

172cm

不思議な青年

無関心

彪雅とは悪友

「どーでもいいけどご飯は？」

アゼカワ
畔川 彪雅

20歳 ♂

182cm

同じく不思議な青年

何故か晴にミコトと呼ぶように言っている

最近ギャグ要員になりかけている

「俺の名字出しても意味なくね？」

黒

3歳 ♂

60cm（尻尾含め）

歩の飼っている猫達で一番愛想がない

葵に突っ掛ることもしばしば

口喧嘩で葵に勝てなかったことはない

マルバス

クロケル

マルコシアス

彪雅の使い魔？ 性別はない

桜井 未兎耶

17歳 ♂

160cm

男の娘ではない女装っ子

何かと不憫な子

「：待ってろよ晴！」

日向 加波

26歳 ♂

歩の兄

1コ下の奥さんがいる

桜井母

[illegible]

これから登場する人

田中 珊瑚 女

飯島 白藍 ♂

19歳

中学時代からの彪雅の僕兼後輩

「白藍邪魔だわ！」

「えー…」

幾田 イクタ
藤 フジ
♂

スミレ

幾田 桔梗 キキヨウ ♂

1
6
歳

三つ子

三つ子の見分け方

藤..真ん中わけ 168

董
左
165

桔梗.. カチューシャ 170

全員名前が紫系統。

晴の小学校からの友達

「僕たちの出番は」

「もうすぐですので」

「待っててな〜♪」

11:31

07:30

ニャーニャーニャーニャーニャーニャー

可愛い猫の声（アラーム）が晴の部屋で鳴り響いている。

もぞもぞと身動きし、天井からぶら下がっている頭上の目覚まし時計に手をかける。

「ふぁー…今日から学校……ねむい」

時計を見つめいつもより30分早い事に疑問を持つ

「は？…いつもより早く設定してある…なんで？」

後30分は寝れるじゃん…あー、ないわぁ…

……寝よ」

眉間に皺を寄せて若干目つきも鋭く、

ブツブツと文句を言って布団の中から動こうしない晴
それどころか二度寝してしまった。

どうやら寝相は良いようだが寝起きは悪いようだ

こんな時こそ愛猫・葵の出番なのだが、葵は他の猫達と寝るのが習慣となっていて

今日もそっちで寝ていたのであった。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

08..00

ニャーニャーニャーニャーニャーニャー

本日二度目のアラーム。

「んゝ………7時ぴったり…

とりあえず着替えよ…」

二度寝したら目が覚めたようで、さっきのように眉間に皺を寄せていないし、目つきも鋭くない。

数分で着替え終え、粗方の準備（顔洗ったり歯磨いたり）を終え

一応今日の時間割（始業式）の予定を呟く

「始業式は8時30分からだから今から出て…あれここ歩さんの家だった……」

さっき（6時30分）は自分の家だと勘違いして二度寝に走ったがここで重大ミスをしたことに気付く

「…え？え、まさか！？あああああああ！！」

慌てて携帯で時間を調べると晴は思いつきし叫んだ

当たり前のように叫び声は家中に響き渡り

晴の叫び声を聞いたミコトと葵は慌てたように階段を駆け上がり晴の部屋のドアを開けた

「ど、どうした！？」

―何かあったの！？

「葵、ミ、ミコト…時計が1時間遅れてて…ここから急いで電車に乗ったとしても40分は掛かるんです…

もう始業式が始まっちゃう…」

―あー…ハレ、二度寝しちゃったのね？

まあ今回は二度寝以外にも原因があるけどね…

「…そうです」

「あー…これからじゃ冲高は遠いよな
つか、ハレ昨日6時30分に起きるとか言っていなかったか？」

事情を知らないミコトは何食わぬ顔で訊ねる

「うう…、二度寝しちゃったんです…私」

「…まあしょうがないか、俺が送ってやるよ

冲高なら電車よりも早く行ける方法があるしな
始業式早々、遅刻キャラを確立させたいなら別だけだな」

と、晴が断れないように脅し文句まがいのことを言った

数秒の逡巡のあと

「すみません、お願いします！」
と頼んだ

晴は車で送って貰い遅刻は免れたのだった

「ミコト、ありがとうございました！
いってきます！」

「おー、いってらっしゃい
あ、俺今日講義あるから昼作れねえんだ
歩の分頼めるか？」

「はい、任せてください！」

始業式だから3時間もあれば終わるということを知ってて頼んだ
のだろう

晴はもう一度お礼を言ってから校舎に入っていた

— — — — —
— — — — —

「おはよ」

「おはようございます」

「おっはー！」

玄関でクラス表を先生にもらい、新しい教室に入った

すぐに晴に挨拶したのは、晴の友達の三つ子の藤と桔梗と堇である。

「おはよー！」

また同じクラスだねー！」

「ええ、とても嬉しいです！」

晴さんいつもより遅かったですわね、

寝坊ですか？」

「そーだよー時計が1時間遅れてたっぽくて…」

「うわー、それは災難だったな（笑）」

「でも間に合ってよかったじゃん」

「そうですわ」

…あ、3年生に転校生が来るらしいんですけど

その転校生帰国子女なんですって」

「へー、帰国子女ってことは英語ペラペラだよねえ」

いいなー！」

「英語かー…むーん」

「桔梗じゃバカだから無理だって」

「藤も英語苦手じゃんか！」

「僕は海外にいかなから良いんだよ」

「あら、そうとは限りませんわよ？」

「え、なんで？」

海外に行く予定なんてあるのだろうか

「晴、覚えてませんか？」

去年の終業式に先生がおっしゃてたじゃありませんの
＞来年の修学旅行はハワイに行くくって」

「「「えーっ！」「」」

「沖高いつからそんなに金持ちになったんだ？」

「え、いや別に英語を必ずしも使うというわけじゃ…」

「ハワイかし、海がきれいだろうな」

三者三様の感想である

「もう30分になりますわよ体育館に移動しましょう？
私たち以外いつの間にか教室からいなくなってますし」

12::3-2

堇の言う通り、晴たち4人以外はとくに体育館に移動していたらしい

もう5分も時間はない。

晴たちのクラスは6階にあり

…しかも体育館から一番離れた教室である。

「ほおら、急がないと始まってしまいますわよ

もう、しょうがないから桔梗はハレをおぶって

桔梗、藤走りますわよ！」

三つ子は全員運動が得意なのだが

晴の場合運動は好きだが、走るのが遅いのである。

「え、ちょっとま…」

「あいあいさー！」

「ハレ、気にしない気にしない！」

晴が意見を言うのは阻止し、ヒョイと晴を背中に乗せた桔梗

「え、凄！キョウ、凄っ…！！」

そして、は、速い…」

長い廊下を猛スピードで走り切り、階段に差し掛かったので桔梗は晴に向かってこれから危険だということがわかったので注意し
といた。

「階段、飛び降りるからしつかり捕まってるよ！」

「へっ！？ひ、ひゃあああああつ……！！！」

が、注意したのが遅かったため一瞬手を離しかけそうになった

この状況を第三者の視点から見れば

階段を凄い速さで三段飛ばしで飛び下りる桔梗

手すりに乗ってスムーズに走っている堇

踊り場を踏み台のようにして階段を全飛ばししている藤

一言でいうと圧巻である

というか、こいつら何者だ…。

特に藤は人間業ではない気しかない

晴はというとあまりの速さに目を回していたのであった

階段の駆け下り…順位

一着が葡萄

二着が堇

三着が桔梗＋α（晴）

晴が目を回している間にクラスの皆が歩いている近くまで来ていた

階段に晴を下して様子を確認する

「ハレ、ハレ、

どうしましょう起きませんわよ…」

「おー完全に目え回してんな…」

「桔梗は階段の降り方が雑なんだよ
僕みたいに降りれば速いの
に
堇はしょうがないけどさ…」

………あー、

もう…しょうがないなあー…

よっ…と
」

晴の鼻と口を摘まんで息を止める

「あら、藤…」

「確かに起きるかもだけど、」

数秒経って

「んむゝ…！ん！ん！

…ぷはーっ！」

晴は正気に戻ったようだ（笑

藤は何事もなかったかのようにパツと手を離し桔梗の隣に立った

「晴も目が覚めたようだし、行きましょう」

「ハレ、ごめんなー

…大丈夫か？」

体育館に入り、自分たちのクラスの列に行く

「へ、平気…

始業式始まるからフジもキョウも前向いたほうがいいよ」

並び順は名前の順なので

女子の列 男子の列

あしたはれ いくたききょう

いくたすみれ いくたふじ

しじまれんこ おおかわらかげみや

そのだあき きしおかしゅう

のとだあいり たのじまじんすけ

かわはしめいこ つちだかい

ろうじかおう わたべたくや

となっているのだ。

12::3-2 (後書き)

沖高は中高一貫校＋全日制、通信制があり

全日制に通う人は少ないため少人数クラスとなっている。

一応クラスの名前(漢字←飛ばしても問題ないよ!…たぶん

志島蓮子(ブラコン

大川原影宮(神社の息子

其田亜季(ギャル

岸岡秀(容姿端麗頭脳明晰

能都田彩里(ギャル

田野島陣輔(体育5

河端芽依子(守銭奴

槌田甲斐(狡賢い・優しい

楼寺火鶯(某国ハーフ

渡邊卓弥(金持ち

13:3-3

校長先生の話…長いなあー…うーん、眠い…眠い…

そうだ、今日することを考えていれば眠くなくなるかもしれないよね、

えーとまず、家帰ったら歩さんと自分のご飯作って、一応ミコトの分も、それでその後葬やほかの猫ちゃんたちと遊んで…あーでも黒君は触れさせてくれなさそだなあーあんなにもふもふしてたし、触りたかったなあー…

……………ガクッ

校長先生の話も早30分、晴は睡魔に勝てなかったようだ
堇が優しく、先生達にバレない様に支えているので晴はこのまま始業式が終わるまで眠っていた。

校長先生の話が終わった後、例の帰国子女の紹介があったのだが、まあそんなこと知るはずもなく

晴が眠っている間三つ子はこんな話をしていた

「なんか今日は珍しく寝てるよな、ハレ」

「しょうがないだろ、葬式が終わったあとなんだし」

「…フジ、無神経ですわよ」

晴が寝ていたからまだいいものの」

「はいはい、気を付けますよ」

「あと引っ越し、したみたいなのよ親戚のお家に
それもあるんじゃないかしら？」

「「引っ越し？親戚の家…？」」

藤と桔梗がはもりながら問う

「ハレの親戚ってあまり聞いたことないんだけど」

「俺もー、去年の夏休みだって毎日俺らと遊んでたじゃん？」

「えーと、確か遠い親戚って言っていたわね」

「ねねー？」

いきなり3人以外の声が乱入する

「蓮子さん、何かしら？」

「最初に言っとくけど私は弟の徳也にしか興味ないんだからね、そこんところよろしく！」

「で、何？」

興味なさそうに藤が問う

「私、今朝ギリギリでえ、教室行かないでここに来たのね

んで裏門とこから少し離れたところ歩いてたらめっちゃカッコいい人が車乗ってんの見つけてー

その人の車が裏門に停まったのねー？

んで、誰が出てくんのかなあって思ったらハーちゃんが出てきたのよお！

ハーちゃんってあんなカッコいいお兄さんっていうか兄弟とかいた

っ
けえ? ?
」

「兄…?
」

「そうね、始業式が終わったらハレに聞いておくわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7166o/>

居候とニートと悪友と

2011年9月15日22時11分発行